



中国がわかるシリーズ 10 漢帝国の盛世と武帝の時代(前)

ライフネット生命株式会社 社長 出口 治明

都を長安に定め、秦の厳罰主義を簡約主義に緩めた劉邦(高祖。BC202~195)は、秦の郡県制に代えて郡国制を実施しました。これは、要地は郡県制、辺境は一族や建国の功臣を王に取り立て、統治する仕組みでした。ところで、始皇帝に一旦は放逐された匈奴は、英明な冒頓単于(ぼくとつ ぜんう、BC209~174)が王位に就き、項羽と劉邦が争っている隙に、オルドスを回復し、大帝国を築き上げました。BC201年、冒頓単于は、親征した高祖を白登山の戦いで撃破し、実質的には漢を属国とする講和を押し付けました。高祖は止むを得ず講和を甘受しましたが、苛酷な秦の支配と打ち続く戦乱に疲弊していた中国にとっては、しばしの休息が必要でした。

その意味で高祖の決断は、正しかったと言えましょう。漢は以後、約400年の命脈を保つことになります。漢は、漢字、漢学、漢詩など、中国の代名詞となりました。漢は、秦の制度や枠組みを、ほぼそのまま受け継ぎましたので、秦漢帝国という言葉もよく使われます。なお、劉邦は、楚の出身でしたので、漢帝国は楚文化の継承者としての側面も持っていました(皇帝と龍のイメージを結びつけたのも劉邦です。周では、王朝のシンボルは鳥であったようです)。

高祖の死後、糟糠の妻、呂后が約15年にわたって専横を尽くします。呂太后は、武則天や、西太后と共に悪女の代名詞のように扱われていますが、呂氏一族の栄達を図っただけで(自らのために高祖と同じ大きさの陵も作らせましたが)、それほど国を傾けた訳ではありません。冒頓単于の全盛期に、身を低くして消極外交に徹したことは、結果論ではあるが、正解であったと評価して良いと思われます。

BC190年には、長安城が完成しました。呂太后の跡を継いだ5代、文帝(BC180~157)は、仁政に努め、厚葬を戒めて自らの陵墓は自然丘陵の横穴としました。なお、文帝は、即位に当たって民衆に爵位を与え、5日間の酒宴を行わせました。爵位は、軍人向けに始まりましたが、国家の慶事に広く民衆にも爵位(秦漢20等爵制)を与え、宴会を許可することも、また、天才、始皇帝の創始によるものでした。里における宴会の席次も、爵によって定められ、皇帝と庶民の間にも、賜爵を通じて、個別人身支配の関係が出来上がっていったのです。



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

続く6代、景帝(BC157~141)の時代、BC154年に、呉楚七国の乱が起こりましたが、ほどなく鎮圧され、その結果、漢の国制は、実質的には秦の郡県制と変わらなくなりました。文帝と景帝の時代は、後に、文景の治と呼ばれ、中国の長い歴史の中でも、特筆される安定期となりました(盛世という言葉が使われますが、他には、唐の太宗の治世—貞観の治、玄宗の治世前期—開元の治、清の康熙帝・雍正帝・乾隆帝の治世などがあげられます)。

BC141年、7代劉徹(武帝)が即位し、武帝の長い治世(54年)が幕を開けました。武帝は董仲舒など学者を用いて儒教による専制国家の確立に努め(曲学阿世という言葉がこの時代に生まれました)、最初の元号(建元)を、BC140年に遡って創始しました。儒教は、君臣父子の礼を説き、もともと帝国秩序の維持には都合の良い学問ではありましたが、六芸(易経、詩経、書経、礼記、春秋の五経と楽)を持つ幅の広さが、漢帝国の要請に合致したのです。なお、五経博士が、この頃、置かれたとされますが、実態は詳らかではありません。また、郷挙里選と呼ばれる、地方の有力者の推薦で官僚を選ぶ制度も始められました。